
バレット学園日記！！

ミロンド2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレット学園日記！！

【Nコード】

N0420Z

【作者名】

ミロンド2

【あらすじ】

ミロンドの引き続きのミロンド2！！
色違いピカチュウと超人的なツタージャ達がおこす、四正学園での生活。

この学校ではスキルを育てるといったが…？

第4話 混合色（ミックスカラー）（前書き）

若干オリジナリティーが入ってますよ。

ラック「若干か？」

うん。…ところでバレットは？

ラック「あいつは…それよりこの作品1〜3話目がみたい人はバレット学園日記をどうぞ！」

あいつより宣伝かい！

ラック「ああ、そうさ。」

第4話 混合色(ミックスカラー)

俺は今ラックと散歩中だ。…というよりも連行に等しい。だって荷物持ちだもん。

ラック「あー買った買った」

バレット「それよりも早く帰ろうぜ。門限過ぎるぞ。」

俺達を通っている…というか住んでる学校は外出は自由だが6:30には帰らなくてはいけないのだ。

ラック「んーそうだね。そろそろ戻ろう…」

あれ?」

バレット「ん?どうした?」

ラックの目線の向こうには不良とその不良に囲まれている…ヒコザル?

不良「おうおう、兄ちゃん少しでいいんだ

金くれ金!」

ヒコザル「も、持ってません…」

不良「じゃあ金持ってこいや!」

バレット「どうする?ラック」ラック「てめーらあ!弱い者いじめすんなやあ!」

あー…バカ…」

不良1「おう?誰だ?お前?」

ラック「ツタージャ。」

不良2「見りゃわかるわ!んなこと!」

不良3「名前はなんだあ?」

ラック「ラックだよ。ちなみにあそこのピカチュウが僕の友達バレット。」

バカあああああつっつ!!」

不良4「おうおう兄ちゃんもこっちこいや」

ああ…他人の振り作戦失敗…」

バレット(おい!どうすんだよ!こいつら)

ラック(ん?ぶちのめす。)

バレット(できんのかあ?)

ラック(まあまあここは僕にまかせて!)

不良1「こそこそ何しとんじやあ!!」

不良1、2、3、4は一気に襲いかかって来た。…全員炎タイプじ

やん!!

バレット「ラック!危ない!!」

土煙がたつた。土煙が晴れると…

バレット「……………!?!」

そこには無傷のラックと倒れた4人の不良

バレット「ラック!大丈夫!?!」

ラック「ん?ああ、大丈夫だよ。」

しかし…炎の攻撃は直撃だったはず……………

…!もしや!!

ラック「うん、スキル使ってみた。」

バレット「具体的にどんなの?」

ラック「タイプを換えるスキル。…んーどんな名前にしようかな」

…」

なるほど。草タイプを水タイプにでもすれば効果は今ひとつだ。…

それよりも

バレット「大丈夫?」

ヒコザル「うん、大丈夫。ありがとう、えーと…」

バレット「バレットだよ。」

ループ「ありがとう、バレット。あ、僕は

ループ。ところで…」

バレット「ところで?」

ループ「もしかして四正学園の人?」

あ、四正学園って俺達がすん(r y

バレット「うん、どうし<r u b y><r b>ラック「混合色

</rb><rp>(</rp><rt>ミックスカラー</rt
><rp>)</rp></ruby>で決まり!」

バレット「ああ、うん…えーとそれで？」

ループ「門限まであと10分(^o^)」

最後まで聞かず、無我夢中で走った。

学園に着いたのは門限5分後。めっちゃ怒られた…んだけど、ラッ

クはなぜか門限前に

帰ってたらしい。…おかしいだろっ!!

第4話 混合色（ミックスカラー）（後書き）

ラック「作者…いないなあ〜じゃおわりだね。」

ちよ？「いますけど待って！あ！あ—————プツッ

第5話 「不幸に叩き落とす悪魔と幸運に導く天使」(テスト)の恐怖(前書き)

ラック「題名凝ってるね。」

いやーそんな感じじゃん？

ラック「んー僕は天使の方かな？」

んまーそこは本文で！！

リース「俺も久しぶりだぜ！！」

ラック「俺と作者(仮)の所を！」

…仮？

第5話 「不幸に叩き落とす悪魔と幸運に導く天使」(テスト)の恐怖

ここは四正学園。ここの1-2では…

リース「あゝ3日後テストだ。点数悪い奴は補習だからな。」

バレット「ちよつと待て!!」

リース「なんだ?変色鼠。」

バレット「鼠言うな!それより3日後つて

なんでそんなギリギリに!!」

リース「あ?連絡ミスだ。じゃあな」

リースは教室を出て行く。…すると

ハクア「ねえ。一緒にテスト勉強しない?僕、成績悪いし…」

バレット「え?あ、ああいいぜ。」

実は言う俺は成績悪いんだか…

ハクア「よかった。ラックも呼んだから!さんポケ寄れば文殊の知

恵っていうし!」

……え?ラック?

バレット「ラック…呼んだの?」

ハクア「…?うん、そうだけど?」

やばい。生きて還れそうにない!

ラックは成績は良い方…というか完璧だ。

だから一度ラックと一緒に勉強したことあるんだが…

バレット「ごめん!やつぱ無理ーラック

「もう一度言っつてごらん?」

バレット「だから行けな…うおっ!」

ラック「行けないなら逝かせてやる。今死ぬかここで死ぬか…どっ

ちがいい?」

強制連行¥(^o^)/

ラック「だから何故x=4、y=3なのに56になんだよ!」
ハクア「だってやり方!」

ラック「-2xなら-4x4!4x4すんな!」

俺達はラックの「暗闇に逃げ場なし」(きょうせいべんきょう)を
させられてる。

え?かつこ悪い?やつぱり?」

ラック「ごたごた言ってるねえーではよおやらんかい!」

バレット「Yes I do!」

俺は英語に取り掛かる。……えーと

“Did you studied English?”を訳せ?
えーと…didだから疑問系で過去系だろ…

Englishは英語…だから

“あなたは英語を勉強しましたか?”だな!

よし!楽勝!次いくぞー!

“I just finished reading this
book.”

はあああああつつつつ???

ラック「そんなのも訳せないのか?」

バレット「いや!無理です!」

ラック「はあ…“just”は“たった今”で

“finished”は“終わった”。だから

“私はたった今この本を読み終えました”

おお…。でも…

バレット「これ…習ってないよな。」

ハクア「うん。そうだよな。」

ラック「おしゃべりはそこまでだ。さあはじめるぞ…」「これは地獄

絵図」(イツツ ヘル タイム)!!」

ギヤアアア……

結果はこうなった。

国語… 56点

数学… 48点

英語… 62点

社会… 65点

理科… 87点

ポケ学… 65点

順位… 98人中82位

ラックは相変わらずオールパーフェクト。

ハクアは大体70点位だったらしい。

そしてリースの最後の一言。

リース「80点以下補習な。今基準決めたけど。」

オワタ¥(＾o＾)ノ

第5話 「不幸に叩き落とす悪魔と幸運に導く天使」(テスト)の恐怖(後書き)

ラック「僕の“隠蔽計画”(パーフェクトミラージュプラン)に狂いは無い!……………」

よしっ! 終わり! ……」

第6話 “楽しむも休むもあなた次第” (がくえんさい)の準備をしよう(前書

ラック「何かの説明みただいな。」

作者「うーん、たしかに…」

ラック「あ！ちなみに四正学園の学園祭は

”敬遊祭”だよ。」

作者「最近、君ここ奪ってない？」

ラック「気のせいだよ」

作者「いやーでも。」

ラック「気のせいだ。」

作者「でもね。」

ラック「気？の？せ？い。」

作者「うーん。」

ラック「気のせいだっつってんだろ。」

作者「はい…。」

第6話 “楽しむも休むもあなた次第”（がくえんさい）の準備をしよう

これは、7月上旬のお話

リース「今度の日曜日に敬遊祭を行う。ちなみにどこのクラスも出店をやる。出店でなんかやりたいやついるか？」

学園祭かあ〜そんなにテンションあがら...

ラック & amp; バレット 除く全員「イヤアツツホウウウツツ！
！」

ああ...みんなハイテンション...

ラックはハイテンションじゃないけど...

リース「嬉しいのはわかったから！なんか案はないか!？」

焼きそば！たこ焼き！かき氷！フランクフルト!...とみんな口々にいう。

リース「あー焼きそば3人、たこ焼き5人

フランクフルト6人、かき氷7人.....」

リースは律儀に数えていく。

リース「よし、俺の気分で焼きそばだ」

あんたの気分かよっ！みんなつつこむ。

..... あーいやだ。このテンション

リース「おう？バレットとラック...ラック寝てんのか...みんなのテンションについていけないのかあ〜？」

俺は何も言わない。

リース「何も言わないって事は凶星かあ」

みんなが俺を笑う。

ラック「...因数分解...むにゃむにゃ...」

こいつはどんな夢をみてんのか...

ラック「テメーらうぜえんだよ。学園祭の時に限ってテンション上がりやがって。うるさいというよりうざい...むにゃむにゃ」

今こいつ自分の意見言わなかった？

ラック「というか焼きそば焼きそば簡単に言うけどあれソースの加減とか色々めんどいんだぞ？その分かき氷は冷やしてくれるからいいけど…むにやむにや。」

リース「じゃあかき氷でいいな。」

こいつ自分がやりたいものにかえやがった

ラック「これが僕の技さ。」

ふう〜…やっぱりな…

リース「じゃあお前ら二人パトロール係な

はい、決定。」

バレット「はあ！？おい、勝手にきめんなよ！！…今回初めてのセリフー！！」

リース「話聞いてないお前が悪い。…意味不明な事言ってるじゃねえよ！！」

ラック「寝るんで静かにしてね。」

バレット/リース「……………はい。」

〜次の日〜

ナムル「ほら！早く何味がきめるぞ！」

ループ「レモン味とかいいなあ〜。」

ラック「ラック（運）次第の味。」

ナムル「怖っ！でも面白そう！採用！」

ラック「zzz…」

ナムル「…って寝言〜っ!？」

ループ「苺ミルク…」

ラック「飽和砂糖水をかけたり、メロンシロップかけたり、硝酸化ナトリウムかけたりしようよ。」

ナムル「硝酸化ナトリウムは却下あ！」

…俺？バレットだよ。……………つまんね。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
e
d
...

第6話 “楽しむも休むもあなた次第”（がくえんさい）の準備をしよう（後書

ラック「行事とかでテンション上がる奴に

殺意がわいた事があるよ。」

作者「わかる、わかる。合唱コンクールとかでリーダーじゃないのに仕切る奴ね。…っていない。」

第7話 “考える章” (にんげん)の世界へ！？ (前書き)

ラック「にゅ。なるほど。“人間は考える章”から考えたんだね。」
作者「うん。色々候補はあったんだけど」
ラック「いいんじゃない？でははじまり、はじまり〜」

第7話 “考える章” (にんげん)の世界へ!?

ここは四正学園。…の1-2は今は理科をしてるのだが…
デンリユウ「でだな、俺は作った訳よ。」

理科の担当ウイル先生は無駄話を続ける。

ウイル「“異空間移動装置” (パラレルワープ) を。いや〜きつかったぜ。」

バレット「先生、どんなやつなんすか？

その〜“異空間移動装置”ってのは。」

ウイル「具体的には、こことは違う世界に行けるのさ。…んで誰か実験体3人いねーか？」

俺は考える。本当にそんな事が出来るのか

…でも本当だとすれば…

ラックノバレットノハクア「はい! (は〜い)

俺(僕)がいききたいですっ!!!」

ウイル「よーし、じゃあ明日行くからな。

準備しとけよ。」

ハクア「ところでどの世界にいくんですか？」

ウイル「秘密」

あー楽しみだな〜…

ウイル「ちなみにリリースも行くぞ。」

…やめよっかな

次の日…

バレット「行ってくるぞ!」

生徒1「死ぬなよWWW?」

バレット「不吉なこというなー!」

ラック「ねえ、早く行こうぜ」
ウイル「んじゃいくぞ！スイッチON！」
キウイ「……ン……ボン！！」
バレット「なんか変な音した！」
チユン！！

ラック「おーい。起きろ。」
バレット「……ん、ここは？」
ラック「どうやら人間界のようだよ。あとハクアとリースと別れちゃった。」
バレット「はあ！？人間界！？」
ラック「うん。さつき俺らと同じポケモンと人間が一緒にいたもん。」

……

バレット「お前……誰だ？」
ラック「え？どうしたの？」
バレット「てめー誰だ！！」カミナリ！！
雷が落ちる。

ラック「おやおや……ばれてしまいましたか……。どうしてわかったんです？」

バレット「一人称だ。ラックは一度も自分を“俺”と言った事はない。本人曰わく“偉そう”だからってよ。」

モン「チエツ、あと少しかったのに。俺はメタモンのモン。おーいラック、ばれちゃった。」

ラック「えー。早いよ。」
バレット「ラック！！どうゆうことだ！」

ラック「……この世界では気を抜くな。そうゆうことだよ。それよりハクアを探しに……」

あつ！ハクアとリース探しにいくぞ。」

こいつ完璧忘れてたな。

>ハクア視点<

はあゝ…よりによってなんで先生となんだか…。ラックとバレットとは別れちゃったし。先生は様子見てくるって行っちまったし。

ハクア「本当に不幸だな…先生は信用したらろくなことはおきないよ…」

リース「誰を信用したらろくなことがおきないって？」

ハクア「うおう！！」

ま、またこの人は！

ハクア「それより、どうでした？」

リース「…人間界だな。人間が沢山といる。…気持ち悪いくらいな。」

人間…本で読んだ事はあるけど、まさか人間がいる世界に来てしま
うとは…

ハクアはため息をつく。

バレットと違う所で一緒に

ハクアノバレット「はあゝ…」

T o b e c o n t i n u e d

第7話 “考える章” (にんげん)の世界へ!?(後書き)

ラック「人間界編はまだまだ続くぜ!」

第8話 “考える章”と“未知な生き物”（ポケモン）の絆（前書き）

ラック「人間界編はいつまでやる気だ？」

作者「んーあと3話くらいかな」

モン「騙されたな!!」

作者「あ、畜生!...とでもいうと思ったか!!」

ラック「どうだ!“絶対権限”（さくしゃ）にかわってみたぞ!!」

モン「な!騙しを騙しで返すとは!!」

作者「...楽しそうだね。」

第8話 “考える輩”と“未知な生き物”（ポケモン）の絆

バレット「んで…これからどうすんだ？」

ラック「“異空間移動装置”も壊れちゃったし…」

モン「それなら空間を司るパルキアに頼んだらどうです？ けっこうフレンドリーな方ですよ。」

ラック「なるほど。…でそいつがいる場所は？」

モン「転換山…あゝテンガン山です。」

バレット「それより、ハクア達探してからな。」

ラック「……………！！リースの声！！」

ラックはすごい速さで走り出した。

バレット「お、おい！ までよ！！」

>ハクア視点<

ハクア「どうします？ このあと。」

リース「まずラック達と合流だな。」ズトド

ハクア「…？ ってうわあ！」

リース「ラックとバレットか…。 ってラックが2人！？」

モン「あ、メタモンのモンです。」

ハクア「あゝよかった。 どうしてわかったの？」

ラック「声」

皆さんは簡単に言わないでね

すると、そこへ…

人「うお？ うわポケモンだらけじゃん！」

ラック「う、人間！」

リース「ここはおれに…」

人「いけ！ トロピウス！！」

リース「じゃなくてみんなでいこう。」

ラック「でもさトロピウスって草？ 飛行でしょ？ なら…バレット！

君に決めた！」

バレット「ざけんなあ！」

雷からのボルテッカー！！

バレット「くらえ！ “電気爆発”（ボルトフレア）！！」

火花が散ってバレットは炎に包まれる。

トロピウス「！！」

トロピウスに直撃！！

ラック「草に炎で飛行に電気って6倍じゃん。すげーすげー。」

ハクア「すごい…。」

人「な、なんなんだ！今の技は！！」

ラック「お、いいぐあいに煙たってんじゃん。逃げるよ…つとそ

のまえに。」

リーフストームからのリーフブレード！

ラック「 “木の葉の凶器”（リーフカッター）」

人「ぐあっ！！」

ラック「今だ！逃げるぞ！！」

ハクア「はあ…はあ…ど、どこまでにげたんだろっ。」

モン「…！おう運がよかったな。ここはテンガン山だ。」

リース「何が運いいんだ？」

バレット「ここに空間を司る…えっと…」

ラック「パルキアにあって元の世界に戻ろう。ってことだよ。」

ハクア「なるほど！！」

モン「でもよ…。今このテンガン山には強敵がたんまりといるから、

俺はここでぬけるよ。頑張れよ。」

ラック「強敵か、楽しみだな。」

バレット「そっだな…。」

ハクア「うー…」

リース「じゃあいくぞ、お前ら。」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第8話 “考える章”と“未知な生き物”（ポケモン）の絆（後書き）

ラック「今回セリフばかりだね」

作者「まあね。」

モン「俺はもう出番なしか？」

第9話 “諸刃の剣” (ネバーエンドソード) (前書き)

ラック「タジャタジャタージャ」

作者「!?!」

ラック「タジャ? タジャタージャ?」

作者「え、えーと…」

ラック「笑える。」

作者「普通に話せよ!?!」

第9話 “諸刃の剣” (ネバーエンドソード)

ラック「モンによるとやりの柱って所に
いるらしいぜ。」

バレット「まあとりあえず上に上にいこうぜ。」

俺達は歩きはじめる。すると…

?「ゲギアアア!!」

ハクア「何の音!？」

リース「…どうやら強敵らしいな。」

リースの目線の先にはバクフーンがいた。

バクフーン「なんで!俺は強いのに!!」

殺してやる!!あんなトレーナー!!…?」

誰だ、お前ら。今機嫌が悪いんだ。失せる!!」火炎放射!!

リースは一歩手前に出る

リース「炎タイプなら俺が…」

ハクア「いや!僕がやる!!」

ハクアの火炎放射!

火炎放射と火炎放射は激突し、相殺した。

ハクア「僕も守られてばっかしじゃ駄目だ!!いくぞ!」

守るからの火炎放射からの体当たり!!

ハクア「炎のツララ”(フレイムダイヤモンド)!!」

しかし効果は今一つだ。

バクフーン「…なんだ?その攻撃?なまっちよろい攻撃で俺を倒せ
ると思うな!」

スキル発動!!

ラック「なっ!?!こつちの世界でもあんのかよ!?!」

フレアドライブ!!ハクアに直撃!!

バレット「ハクア!?!」

ハクアはかすった程度だった。…しかし

ハクア「うつ!?」

リース「麻痺状態!?なぜだ!?」

ラック「スキルだろう。」

バクフーン「正解だ。俺の“7つの悪魔”

(アルティッコサタン)は麻痺、毒、火傷、

凍り、混乱、眠り、たまに瀕死、攻撃に当たると必ず状態異常になる。……そのせいで俺は親に捨てられたがな。トレーナーにも!!」

炎のパンチ!

ハクア「ぐっ!!」

ハクアは毒状態になった。

バレット「やべえ!ハクア!てつだ……」

ラックの殴り飛ばす

バレット「ぎやぐはあ!ラ、ラック!何しやがる!!」

ラック「大丈夫。新しいスキルが目覚めるよ。…ハクアのね。」

ハクア「んがあああああああああああああつつつつ
!!!!!!」

ハクアは咆哮をあげる。

その瞬間、ハクアは凄まじい熱気を発した

バクフーン「何!?!」

ハクア「がああっ!!」

ハクアの火炎放射!効果は抜群だ!!

バレット「なんで!?!」

ラック「多分:スキルの効果でしょ。自分の技を効果今一つでも効果抜群にするスキル。その代わり精神が危ない。“諸刃の剣”

(ネバーエンドソード)と名付けよう。」

またこいつは……

ハクア「グガアアツッ!!」

ハクアの“炎のツララ”!効果は抜群だ!!

バクフーン「ぐああっ……!!」

バクフーンは倒れた。

バレット「よっしゃ!!」

ラック「おい!ハクア。大丈夫か?」

ハクア「……………うっ…」

ハクアが倒れる。しかしそれを見透かしたようにリースはハクアを支える。

リース「お前もスキルゲットしたか…。」

ハクア「はい…。」

リース「んじゃ戻ったらスキル報告書類を書いてもらうからな。」

ラック「あーあれ面倒くさっかた。」

ハクア「えっ…」

バレット「いいから次の階いくぞ。」

俺達は階段を登る。

テンガン山二階は…水のステージだった。

T o b e c o n t i n u e d

第9話 “諸刃の剣” (ネバーエンドソード) (後書き)

バレット「なんか色々比べよー。」

ラック「まず強さだね。えーと…」

ラック<バレット<ハクアだね。」

ハクア「学力は…」

ラック<ハクア<バレットです。」

バレット「んで最後は作者が好きなキャラ

ラック<<<<<<<<<<<<<<<<<<<ハクア<バレット」

バレット/ハクア「どんだけツターじゃ好きなの!?!作者!?!」

第10話 “自尊心” (プライド) (前書き)

ラック「訂正：ハクアが最初ハクルになってたけど……」
作者「間違えた。ただ直すつもりはない」

第10話 “自尊心” (プライド)

バレット「水のステージか…。」

？「おや？誰です。私の住処に侵入するのは？」

声が出た方を見るとミロカロスがいた。

リース「お前の住処を荒らしにきたんじゃないやなくて俺たちはやりの柱にいきたいんだよ

そこを通してくれ。」

ミロカロス「いや、と言ったら？」

リース「無理やり通る。」

ミロカロス「ふふっ気にいりました。最近弱い者ばかりですからねえ。あなたも弱い者じゃないのを願いますよ！！」

ミロカロスのハイドロポンプ！

しかし攻撃は外れた。

バレット「おい。水タイプなら俺に…」

リース「いや確かに相性はいいが、ステージが悪い。水中戦なんてやったこと…」

ラック「あるよ。」

リース「お前はだまれ。とりあえずここは俺がやる！」

リースのハイドロポンプ！！

効果は今一つだ！

ラック「僕も草だけど…」

ミロカロスの冷凍ビーム！

リースにあたった！

リース「うおっ！！」

ラック「やつぱりかあ。」

バレット「いや、お前スキルあんだろ。」

ラック「……………いや。多分…僕のスキルそんなんじゃないと思うね。」

「リースのハイドロポンプ！」

天井にあたった！

ミロカロス「？何をやってるので……！！」

リースの岩石落とし！

リース「ふん、こちらは何万と生徒を見て戦ったんだ。いまさら……！？」

ミロカロス「やっとききましたね……。」

リース「スキルか！？」

ミロカロス「ええ、そうですとも。私の

“死幻覚”（デッドオブアイ）は私の攻撃に

あたったものは視界が狂う……！！」

ラック「こいつは、やっかいだな。」

リース「……………！！」

リースの目からはまだ戦意はあるようだ！

リース「お前、なめんなよ……教師としての

“自尊心”があるかぎり生徒の前で無様な姿晒せるか……！！」

リースのハイドロポンプ！からの冷凍ビーム……！！

リース「くらえや！“氷河落とし”（フリーズブレイク）……！！」

ミロカロス「そ、そんな……！！ば、バカなああああ…………………」

リースWIN……！！

ラック「んじゃ行きますよ。」

リース「俺になんか言わねーのかよっ……！！」

ラックノバレット「はいはい、凄かったですねー（棒読み）……！！」

リース「お、お前らっ……！！」

To be continued

第10話 “自尊心” (プライド) (後書き)

ラック「くむくむ。帰りたい。」

第11話 “喜劇”と“詭劇”、“興劇”と“凶劇”（前書き）

ラック「うわーい。僕の秘密？」
作者「うん、そろそろかなって。」
ラック「……………はじめようぜ。」

第11話 “喜劇”と“詭劇”、“興劇”と“凶劇”

俺達は今とても長い階段を登っている。

ハクア「あとどれくらいで…やりの柱だろうね。」

リース「わからねえ。でも戦う準備はしとけよ。」

ラック「もちろん…!!」

ラックの驚いた顔を見て俺は

バレット「おい！ラックどうした!？」

しかし俺が問いかけてもラックは反応しない。すると…

？「久しぶりだな。“興劇”の“喜劇”。ラック

けっこう探したぜ。」

ラック「どうも久しぶりだね。“凶劇”の“詭劇”のジット。会い

たくなかったよ。」

ジット「俺は会いたかったけどな。」

ジットと言われたそいつはツイッタージャ、ラックとそっくりだった。

ラック「そっくり”ではなく“同じ”だ。」

ジット「そうか、元はといえ俺達は同じだったんだし。」

ラック「うるさい。何の用できた。」

ジットはニヤリと笑い

ジット「お前のスキル、“電子回路”（アルティキューブ）を回収

しにきた。」

ラック「……………」

ラックは何も言わない。するとリースは

リース「なんだ？その電子回路ってのは」

ラック「…物質を変換するスキル。これを使って僕は自分のタイプ

を換えた。」

なるほど、ラックのスキルはタイプを換えるスキルかと思ったが物質を変換するスキルだったとは…。

ラック「ま、だとしても渡す気は一切ないよ。さっさと帰れ。」

ジット「そいつぁ、無理だ。だったらお前らの仲間を人質として捕つてもいいんだぜ？」

ニヤリと笑うジットを見てラックは言った

ラック「勝手にすれば？」

リースノハクアノバレットノジット「!？」

ラックは冷たい目で言う。

リース「お、おい……」

ハクア「そ、そんな……」

ラック「俺は例え人質をとられても屈しない。お前だろうとなかろうが。」

“俺”…ラックが一言はみんなにとっては普通と思うが、事情を知ってる俺は違う。

ラック「なめてんじゃねーぞ？“俺”。確かに怒りや恨みの感情はお前が受け持っているが…俺が怒りや恨みの感情がないという訳ではないんだよ。」

ラックは怒る事が少ない。それは最近付き合い初めたハクアが感じている事だ。

ラックは怒りの感情を外にださない。

ただしその感情をだしてしまった場合…

ジット「はっ。倒すつもりか。」

ラック「……………!!!」

ラックは声にならない声、人間の言葉で言う超音波を出す。…がそれはただの超音波ではない。…超音波を超えた超音波。

“弔怨波”（ブレイクソプラノ）!!!

ジット「……………!!!」

ジットは耐えられなくなって吹き飛ば

しかしラックの“弔怨波”は止まらない

ラック「……………!!!」

しかしこんな高音をずっと出せる訳ない。

ラック「…ハア…ハア…」

体力が沢山あつても息が続かないなら意味がない。

ラック「ふう…ふう…すう…すう…！」

ラックは息を吸う。そして…

ラック「…すう…すう…！」

“弔怨波”を繰り出す。そしてあるうことが

エナジーボールを大量に

作り、上に投げた。ジットは何がしたいのかわからない顔でラックを見ている。

ラック「何ボーつとしてんだ！！“新緑の襲撃”（リースストーン？ストーン）！！」

これは“流星群”を草タイプで行ったものと思えばいい。

ジット「ぐつああつ！！」

ジットはどこかへ飛んでいった。

ラック「…ふう。」

ハクア「お疲れ。」

バレット「大丈夫か？」

ラック「ああ、それにあいつが持ってた

スキルも何個か回収できたし一石ニマメパトだよ。」

リース「んじゃ帰ったら報告書な。」

ラック「へいへい。…つとそれより、やりの柱はその階段を登つたらいけるぞ。さっさといこうぜ。」

バレット「うん、そうだな！」

To be continued

第11話 “喜劇”と“詭劇”、“興劇”と“凶劇”（後書き）

ラック「次回人間界編（とかいいながら全然人間の接点がない物語）
が終わる！」

作者「括弧余計。」

第12話 元の世界に戻るけど…（前書き）

ラック「CHC13いりますか？」

作者「ん？何々？ってクロホルム！？」

ラック「ちよいと使ってくる。」

作者「おい！！ちよっ！まて〜………」

バレット「…俺って主人公かな。」

第12話 元の世界に戻るけど…

ラック「お、見えてきたぞ！」

ハクア「あ、あれがやりの柱…」

バレット「そこにパルキアがいるんだな」

リース「よし、じゃあいくぞ！」

俺達は階段を登りきった。すると…

？「誰だ？貴様達。」

声が出た方向にいたのは、パルキア。

ラック「“異空間移動装置”によってこっちの世界にきちまった。

元の世界に戻して欲しいんだが…」

パルキア「ふむ、なるほど。所でそのピカチュウ。……貴様をどこかで見た事があるような気がするんだが…。」

バレット「……きのせいだろ。」

パルキア「ふーん？まあいい。では戻るが

どこに戻るんだ？」

ラック「四正学園つて所。」

パルキア「了解した。」

ウィル「いやーまさか成功するとは…」

ナムル「失敗前提だったんですか!？」

ウォル「おい、それより…この歪みはなんだ？」

するとその歪みから4人の影が…

ナムル「…あ、おかえり。」

ラック「いやーびつくりしたよ。」

リース「ところで今何時だ？」

ウィル「お前らが発した日から20日と5

分だぞ？」

ハクア「…と、」

リース「いう、」

ラック「ことは…」

バレット「ああ！俺のセリフ…！」

明日「敬遊祭”じゃん。

第12話 元の世界に戻るけど…（後書き）

ラック「今回短くない？」

作者「……………次回“敬遊祭”！長編！！」

第13話 敬遊祭で大混乱!?(前書き)

ラック「今日は長編なんだよね?」

作者「ん?ああそうだけど...」

ラック「ギヤラは?」

作者「は?」

ラック「ギヤラよこせよ。」

作者「.....」

第13話 敬遊祭で大混乱!?

今日はまちにまった敬遊祭だ。…だけど

バレット「なんで俺達がパトロール&mp・宣伝係なんだよ!」
ラック「まあまあいいじゃん。パトロールと偽って飯でも食べば。」
バレット「そうだな…。」

?「なつつつとらーん!」

突然の大声に俺は固まってしまった。

この声はもしかや……

ラック「あ、バレット…逃げる?」

バレット「うん。」

俺達は世界記録も超えるかもしれない速度でスタートダッシュ!

?「こらあー! ! !またんかあー! ! !」

謎の大声の人物は俺達を追いかける

ラック「うるせえ! 黙れ! ! !」

バレット「ついてくんな! ジジイ! !」

俺達を追いかける声の正体は俺達が小さい頃近所にすんでた偏屈ジ

ジイ…エンテイのフロウだ。

フロウ「誰がジジイじゃ! その前にまたんか! ! !」

ラック「なんでここにいんだ! ! !フロウ…」

………さん! ! !」

ものすごい葛藤の末ラックはさん付けした

フロウ「お前達の学園祭見に来てやったというのに! ! !なんとという
急げ具合じゃ! !」

バレット「あ、俺達のためなら1・2のかき氷よろしく…。………

さっさといけよ! !」

フロウ「お前達に喝いれるまでいくか! !」

ラック「愛がこもった?」

フロウ「ああ! !」

バレット「…ただけに？」
ラックノバレット「割愛」

ラック「撒いたか？」

バレット「学園祭楽しみたいのに…」
ピンポンパンポン…

>ただいまラックとバレットを捕まえますとフロウさんから100万ポケが貰えます。皆さん頑張つて捕まえてくださいね！<

バレット「あのジジイイイイ！！」

ラック「学園祭がリアル鬼ごっこに！！」

生徒「あー！いたぞ！捕まえるー！！」

バレット「うわ！さっそく！！」

ラック「くらえや！眠り粉入り煙玉！（ピカチュウ族には効かないよう調査！）」

バレット「よし！いまの内に！！」

俺達は倉庫の裏に隠れる。

ラック「ここなら……………」

ラックのリーフブレード！

ゴースは倒れた！！

ラック「誰もいないな！」

バレット「ああ、そうだな…。ま、それよりどうする？」

ラック「…ハクアとナムルを仲間にするか…」

バレット「ハクアはわかるけどナムルはなんで？」

ラック「ナムル＝委員長＝真面目＝クラスのみんなを裏切らない…からだ！！」

バレット「あ、ああ。そうだね…。」

ラック「ハクアもナムルも教室だからいくぞ！バレずにいけるルートがある！！」

ハクア「それで僕達に協力を？」

ラック「うん。」

ナムル「人を売ることが大嫌いな僕に頼んだのはいい提案だよ！」

バレット「んじゃ二人は偵察係で。」

ラック「待ち合わせ場所は僕がみつけた……………つて所で！」

ナムル「そんなところあったんだ！」

ハクア「じゃあ…………金は君達持ちだけど食料調達と偵察は任せてよ！」

バレット「まで！」

ラック「暗号決めようよ。」

バレット「あ、いうなー！」

ナムル「じゃあ……“打倒”ってきいたら“フロル”でいい？」

ラック「うん！じゃっそこで待つてる！」

ラック「ふああ〜暇だ〜」

俺とラックはいま秘密基地にいる。

もう一回目の食料調達がおわり偵察状況が終わりハクア達が出ていった所だ。

ハクア達の話によると、みんな死に物狂いで探していて一人で探しているもの、パーティーを組んで探しているものがあるようだ。

ドンドン！

？「開けて！！」

バレット「打倒？」

ハクア「フロルフロルフロルう！！」

なんだか様子がおかしい

ラック「どうしたんだ？」

ナムル「はあ…はあ…フロルが…僕達の事を協力者と見抜いて…タ
ーゲットに…」

バレット「じゃあどうするんだ!？」

ハクア「食料は沢山勝ったけどずっとここにいるって訳にはいかな
いし…」

するとラックが立ち上がる。

バレット「ラック？」

ラック「ちよいと偵察してくるわ。」

ハクア「ええ!?それは危ないよ!まさに

ガブリアスの大群に肉を入れるだよ!」

ラック「ジットと戦いの時スキル何個か回収したんだけどその中に

“ 隠蔽計画 ” (ミラー ジュパー フェクトプラン) があったから」

バレット「どんなスキル？」

ラック「カクレオンってポケにいるじゃん？」

あいつと似てるんだけど姿を見せたままだけど僕と認識できないス
キル。ま、ぶつちやけ初使用だけと…いつてくる!」

バレット「ちよっ!おい!!」

>ラック視点<

ラック (ふんふふーん 初めてのラック視点)

今僕は僕達を探しているポケ々が通りまくる廊下を歩いている。

ラック (おもしろいほどばれないな…ってあいつは!!)

僕の目の前にはこの事件の張本人、フロルがいる。

T o b e c o n t i n u e d

第13話 敬遊祭で大混乱!? (後書き)

ラック「微妙な所で終わったな！」

作者「ごめんごめん。次回に続く！」

第14話 敬遊祭で鬼ごっこ!? (前書き)

あら(い)すじ(書き)

まちに待った敬遊祭!!

ラックとバレットはパトロール係をサボって飯を食べようとするがそこにラック達の

小さい頃いた近所の偏屈ジシィフロルに出会い追われてしまう! ついでに協力してたハクアとナムルも!!

第14話 敬遊祭で鬼ごっこ!?

ラック(大丈夫大丈夫。僕には“隠蔽計画”がある!)

フロル「お主。」

ラック「は、はいいゝ()?」

若干発音が上がった声で僕は返事を返す

フロル「ラックとバレットとハクアとナムルとループをしらぬか?」

……………えっ?

フロル「だからラックと(r y)」

ラック「知りません。し、失礼します」

僕は忙しきで基地に戻る

ラック「あけて、ラックだよ。」

バレット「打倒?」

ラック「フロル」

ガチャ…

ラック「なあ!ループっているか?」

ハクア「いないよ?どうかしたの?」

ラック「いや、偵察中フロルに出会って話かけられたんだけど、ど

うやら僕達以外に

ループも探しているらしいんだけど…」

>ループ視点<

ループ「火炎放射!」

効果は抜群だ!!

ループ「な、なんだよ。こいつら。」

俺はいま俺を追いかけてくる3匹のポケを倒した所だった。

俺は普通に敬遊祭を楽しんでいると急に追いかけてきたのだ。

ループ「そ、そっぴやラックとバレットを捕まえて。とかいう遊び

があったような…

!もしかしたら俺巻き込まれた!?!」

リース「か、喝？」

?「おぬしらあああああ!!!」

リース「…」

ハクア「>逃げますか?<>はい<

ラック「エスケープ!!!」

声の正体は言わなくてもわかるよね

フロル「逃げても追いかけるぞ!!!」

T o b e c o n t i n u e d

第14話 敬遊祭で鬼ごっこ!? (後書き)

ラック「おうらあっ!!」

作者「うお!？」

フロル「またんかいつ!!」

バレット「電磁砲!!」

フロル「きくかつ!!」

作者「…一体なんなんだ。」

第15話目 奥義“林の刀”（前書き）

作者「ラックの都合上一旦ここ中断する」

第15話目 奥義“林の刀”

フロル「ふふ…逃がさんぞ…」

ラック「……………」

ラックは動かない

リース「おい！逃げるぞー！！」

ラック「いやだね。こいつを倒すー！！」

フロル「できるのか！？」

ラック「やってやんよ。」

リーフブレード二刀流！

ラック「“林の刀”（ツインリーフブレード）」

フロル「ふむ…だがそれではたおせ…」

ラックの切りつける！

フロル「ぐはっ！遠慮はないのかー！！」

ラック「いつも喝入れる時遠慮無しだったし。」

ラックの高速抜き刀！

フロルはどうかよけた！！

フロル「ふう…年はとりたくないもんじゃの…」

フロルの火炎放射！！

ラックは水タイプに変化した！

効果は今一つだー！！

フロル「それがお主のスキルか…」

ラック「…違います。」

フロル「嘘つくな。」

両者睨みあい…今激しい攻防が繰り広げられるー！！

バレット「雷ー！！」

フロル「 % x ? & a m p ; , £ \$? ! ? 」

ラック「あ、バレットー！！」

フロル「な、何い…！！？」

バレット「さつきまでよくやってくれたな！ラック！…きめるぞ！
！」

ラック「久しぶりだね。」

ラックのリーフストーム！！

リーフストームがバレットを包む！

バレットのボルテッカー！！

フロル「な！？」

ラック/バレット「雷の渦ボルトスラッシュ！！」

チュツツツドーーーーーン！！！！

激しい爆発が起きた

フロル「……………合格じゃ。」

ラック「？」

フロル「僕は実はもう死んでおるんじゃ」

バレット「目の前にいるじゃん！？」

フロル「生意気な所は変わってないのう。僕はお前達が心配だったんじゃ。……………だが

お前達は色んな仲間達がおる。これで安心して逝ける。」

フロルと体が薄くなっていく。

ラック「……………」

フロル「もしも道が分からなくなったら仲間を信じて……………」

バレット「いいからさっさと逝けよ。」

フロル「…涙が隠せてないぞ……………」

バレットは涙を流していた。

バレット「ごみが目に入っただけだ……………」

フロル「そうか……………まあいい。残りの貴様達の人生に目一杯の幸あれ。」

「

そういつてフロルは消えた

バレット「人の死に触れるってあの時以来だよ……………」

ラック「…泣きな。」

バレットは声も出さない静かな声で泣いた

バレット「……………っ！」

リース「でだな！学園祭が終わったから…次は…」

ナムル「探検隊体験。でしょ？」

リース「ちっ。そうだ。」

舌打ちしやがった、こいつ。

…所で探検隊体験って？

第15話目 奥義“林の刀” (後書き)

ラック「次回！探検隊編！！」

第16話 探検隊体験って言いにくい(前書き)

ラック「題名ただの感想だよな。」

作者「うん。悪い?」

ラック「悪くないけどイライラすんな。あれ?こんなところにサンドバッグが」

作者「すみませんっ!!」

第16話 探検隊体験って言いにくい

バレット「探検隊体験って何ですか？」

リース「探検隊探検：体験隊体験：あーもう！た？い？け？ん？た？い？た？い？け？ん！！は
だなあ〜」

間違えすぎです。

ナムル「まあ探検隊のギルド行って探検隊の活動を体験しよう。ってこと。」

バレット「なる程。」

リース「チームは二人一組。向こうで探検隊の人とチームになるからな。えーとチームは…まず（略）ナムルとハクア、（略）んでバレットとラックだ！」

バレット「おい！ラック一緒だぞ！」

ラック「…zzz」

静かだと思ったら寝てたのか…。

ハクア「その体験はいつですか？」

リース「えーと…あつ…」

バレット／ハクア／ナムル「あつ」ってなん（ですか！！）（なの！？）だ！！」

リース「今日だった 早く行くぞ。」

バレット「ばあー！かっつ！！」

ナムル「気づいて下さいよ！！」

ハクア「周りの教室が静かだと思ったら！！」

〜ギルド〜

リース「ここから適当行動だ。死なねえーように頑張れよ。」

嫌な奴だ、こいつ！

ラック「僕達と一緒になるチームは？」

バレット「えーと…リオルのリルとイーブイのリークだね。」

ラック「こうゆうときに遅刻ってよくあるよね。」

バレット「ないな…」

するとリオルとイーブイがこちらにきた

リル「すいません…遅れました。」

バレット「……………」

本当にありやがった。ラックをみると…

オタマロ人形こっちに向けている。うぜえ

バレット「あ、大丈夫ですよ。こっちも今来た所ですから…」

T o b e c o n t i n u e d

第16話 探検隊体験って言いにくい(後書き)

新キャラ登場!!

リル「ここ…話しても大丈夫かな？」

リーク「大丈夫よ。というか私が初めての女キャラらしいわね…」

リル「男っぽい名前なのにね。」

リーク「次言ったらす。」

リル「すみません」

ラック「せっかくの後書きだから自己紹介すればよかったのに…。」

作者「主人公よりも先に後書きにちゃんと出れるとはね…」

ラック「あんたがツタージヤ好きだからだろう。」

作者「じゃあ締めは新キャラ2人に！」

ラック「バレットでさえできないのにw」

リル/リーク「次回も見て下さい!!」

バレット「……………言いたかった…」

第17話 探検隊体験のはじまり!! (前書き)

リル「……………また?」

リック「さすがに……。」

ラック「僕はほぼ毎回だよ。安心して!」

作者「……後書きにバレットだしてやるか」

第17話 探検隊体験のはじまり！！

ラック「あ、あなた達がリルとリークですね。：僕はラックです。んでこつちのオタマロ人形持つてるのがバレットです。」

いつのまにかもっていた：

リーク「あ、よろしくおねがいます。早速ですけど依頼受けましますよ。」

バレット「どんなのですか？」

ラックノリル「生死を共にする仲間なんだからタメ口でいいでしょ！」

バレットノリーク「あ、そうだね…」

リル「んじゃこの依頼でいいか？（ラックが選んだ）読むぞ…

依頼主：ランドロス

内容：いたずらっこのボルト口とトルネ口をどうにかして下さい。

私はもう疲れました。

ランク：Eランク

バレット「Eランクじゃないだろ！！」

リーク「私もさすがにそう思う。」

ラック「よし、やろつ。」

強制決定。

（雲泥の牢獄）（実際はありません）

リル「牢獄だけに怖い雰囲気だね…」

天気があられになった。

ラックは氷タイプになった。

バレット「ずるい！！！」

ラック「そこらへんに脱走囚いるらしいからきをつけろよ。」

リーク「あ、ガブリアス…!」

リル「最初から!?!」

ガブリアスはあられの影響で（効果抜群のようだ!!(1200のダメージ。

ガブリアスは倒れた。

リークに4のダメージ!

リルに3のダメージ!

バレットに4のダメージ!

バレット「効果抜群だとそうなんの!?!」

ラック「なあなあ。今考えたんだけどよ」

リル「うん。どうしたの?」

ラック「みんなのタイプ、氷タイプにすればいいんじゃない?」

バレット「早く気づけ!さあやって!」

リルは氷タイプになった

リークは氷タイプになった

バレットは氷タイプになった

リル「これであられの影響は大丈夫だ。」

リーク「あ、階段!」

ラックは緑グミを拾った。すぐさま食べた

バレット「俺も欲しかった!」

（2F）

モンスターハウスだ!!

リル「ついたとたん!?!」

ラック「仕方ない!」

ラックはワープ玉を使った!

ラック、リル、リーク、バレットはどっかにワープした!!

ラック「さてと…」

ラックはあつまれ玉を使った!!

リル「なるほど…こつこつ作戦だったのか…」

ラック「よし!階段探すぞ!」

リークはオレンの実をゲットした。

リル「どこにあるんだろう?」

ラック「あれ?あれカクレオン?」

カクレオン「いらっしや〜い。」

リーク「カクレオンをお店だ。」

ラックはセカイイチを拾った

カクレオン「セカイイチは450ポケです」

ラック「他のも見せて。」

ラックはカビアラア〜を拾った

バレット「なんであるんだよ!」

カクレオン「合計で1200ポケです。」

ラック「ほい。」

カクレオン「まいど〜」

リル「じゃあ行こうよ...」

リーク「階段あつたわよ!」

バレット「なあラック...」

ラック「何?」

バレット「セカイイチくれない?」

ラック「無理。」

〈3F〉

階段はこつちにありそうな気がする!

リル「誰?」

リーク「ラックからもらった透明グミもらったら...」

ラック「わかりやすいからいいじゃん。」

バレット「セカイイチ...」

ラック「欲しいの?」

バレット「うん!頂戴!いやください!」

ラック「だか断る!」

バレット「ひどい!」

リル「まありんごくらいは僕があげるから...ね?」

バレット「ありがとー!!」

リック「ところでここ何階あるの?」

ラック「Eランクの意味わかるでしょ。」

「……3階。あいつらがいんのは……」

〈雲泥の牢獄最上階〉

T o b e c o n t i n u e d

第17話 探検隊体験のはじまり!! (後書き)

バレット「やったー!!」

ラック「やっとでれたな。あ、次回もよろしく。作者のやる気がないんで後書き終了だぞ!」

バレット「え、ちよっ…まっ—プツッ

第18話 VSトルネロス&ホルトロス!! (前書き)

ラック「ここは私の所になりました。この場にでたいのならば…。
あつ今作った小説かくね。」

|||||

ここはポケル^{オソク}学園の倉庫裏。

ここにいる沙懺黎^{オソク}君は告白を受けていた。

「ずっと好きでした!付き合ってください」

「え?ぼ、僕でいいの?」

「はい!」

「だが断る!!」

|||||

バレット「酷いな!こいつ!」

ラック「では本編をどうぞ!」

ールエナジーボールエナジーボールエナジーボールエナジーボール
エナジーボールエナジーボール！！

トルネロスとボルトロスを倒した！！

リル「僕達の出番無し…」

リーク「凄い強かったよね。」

ランドロス「ありがとございます！これがお礼の黄色グミです。」
バレット「うああ〜…。食べていい？」

リーク「今回役にたちましたからね。どうぞ遠慮なく。」

ラック「12000ポケの内11880ポケは回収されんだろ？だ
から…一人30ポケだ。」

バレット「ねえ？このあとどうすんの？」

リル「一回の依頼がクリアしたらそこで自由なんですけど…食事で
も行きますか？」

ラック「そうだね。どこかいいところあるかい？」

リーク「うーん…ここらへん少ないから…」

浜辺のラーメン屋はどう？」

ラック/リル「あーあそのチャーシュー麺美味しいよね！」っ
てあれ？」

今声ふたつじゃなかった？

リーク「ラックここに来た事あるの？」

ラック「僕ここの卒業隊員なんだか…」

リル「へ？」

リーク「な？」

バレット「はい？」

うん、整理しよう。

ラックはそのラーメン屋を知っている。

ラックはこの卒業隊員

元隊員だったためルールなど知っている。

(分け前も知ってたし…)

ラック「ま、今は学問に集中したくて卒業したけどね。」

リル「そ、そんなに簡単なの？」

ラック「あいつがいたからね。」

リル「あいつ？」

ラック「うん。今はあいつは医者かな。

なりたいていてたし。いやあの兄弟はどうか？店でも開いて
るのか？……

ローズとライトとレフト「

To be continued

第18話 VSトルネロス&ホルトロス!! (後書き)

リル「ローズとライトとレフトって誰？」

ラック「昔組んでたパーティー。ローズはロゼリア。今はロズレイドか…んでライトはプラスル、レフトはマイナン。詳しくは次回！」

第19話 気まぐれで決まる運命(前書き)

ラック「さっさとはじめよ」

第19話 気まぐれで決まる運命

バレット「ローズう？」

リル「ライトお？」

リーク「レフトさん？」

リークは礼儀正しいようだ。

ラック「うん。ねえリーク、リル。ここらへんにひっそりとした初めての人は近寄り難いけどすぐく有名な病院ない？」

リル「いや、もうあそこしか…」

ラック「じゃあそこに連れてって」

陰気な雰囲気の中の森の片隅。そこには怪しい雰囲気を醸し出した病院があった。

ラック「さあ。入るよ」

リーク「正直言ってここ苦手…」

バレット「なんかすごいなあ」ガラッ

？「おや…いらつしゃい。ってラック？」

ラック「今日は休みだね？ローズ。」

ローズ「そうだけど…後ろの3人は？」

バレット「あ、バレットです。」

リル「探検隊のリルです。こっちは…」

リーク「リークです。」

ローズ「で、何の用で来たんだい？」

ラック「いや、探検隊体験で久しぶりにこっちきて。久しぶりに会おうかって」

ローズ「探検隊…ああ、懐かしいね。6才にして卒業記録を残したラック。君が最年少なのにリーダーだったね。」

リル「…そっいや、親方がそんな記録があるって聞いた…」

親方「世界には凄い子がいるんだ。4才にしてギルドに入門。その2年後卒業。最初は一人でどんな依頼もこなして…。卒業の理由は“飽きた”から。…卒業試験をあんな難題にしたのに…」
リル「その難題って？」

親方「……………天才の科学者が残した暗号を たったの一時間で…。あの子は天才じゃなくて賢者でもない…“神の化身”なんだろうね…」

バレット「そっいやラックとは2才からの友達だったけど途中、証拠も痕跡も理由も残さずどこか行ったもんね…」
リーク「凄いです…」

ローズ「……………昔の話、聞かない？」

ラック「言わなくても言うがな。……………」

（ラック（4才）視点）

僕は故郷を抜け出した。自分でいうのもなんだが僕は気まぐれだから…。故郷にいるバレットだけが少しの不安。

ラック「さてと…どうしようかな。」
？「君、何してんの？」

僕の横から声が聞こえた。しかし姿は見えない。

ラック「…旅ですよ。あまりにも故郷が暇なんで思いたって、抜け出した気まぐれ者ですよ。」

？「へえ〜君なんて名前なの？」

ラック「ラック。」

ロウ「僕はロウだよ。あそこの崖のてっぺんにあるギルドの親方」

ロウと名乗ったポケモンは全体がピンク色のイーミュウだった。

ロウ「ところで君行くあてとかあるの？」

ラック「ないですよ。まあ世界の色々な所を見て周りたいたいですけど」

ね。
「
ロウ」じゃあ

僕のギルドで探検隊にならないか？」

T o b e c o n t i n u e d

第20話 ラックギルドへ入門

ラック「…探検隊になるためギルドへ入れ…と。」

ロウ「うん。親方推薦だし期待のルーキーになれるって!」

ラック「2つ名とか肩書きとか嫌いなんだかまあいいですよ。食事と住まいを確保できれば。」

ロウ「じゃ!決まりだね!!」

ロウ「ということで新しく入ったラック君です。みんな仲良くな
」

みんな「はい。」

僕が入った事にみんなは驚いた。理由は簡単。親方の推薦だったか
らだ。

だからこそ妬まれることもあった。

ある日の事:僕は掲示板をみていた。

ラック「今日はどんな依頼受けようかなあ

久しぶりにあのラーメン屋いって情報交換しようかな。」

僕が今日の予定を考えていると

?「おーい。」

ラック「あれ?どうしたんですか?ソウルさんとシルマさん。」

ソウル「お前にこの封筒渡してくれって。」

俺はパシリじゃないのに…。」

ラック「…?誰からですか?」

シルマ「ブーバーでしたよ。」

ラック「ふうん。ありがとう。」

僕はその封筒をあける。内容は…

「助けて下さい。今僕は天空の火山にいます。しかし強い敵に襲わ
れ動けなくなりました。お礼は弾みます助けてください!」

僕はすぐさまそこへ向かった。

…しかしその5秒後、お尋ね者の掲示板が更新されその中にブーバーが混ざっていたのは僕は知らなかった…

…天空の階段頂上へ

ラック「草タイプだからここきついわ…炎か飛行ばかり…。それよりここ頂上だよな？依頼人は？」

僕は辺りを見回す。するとロゼリアが倒れていた。

ラック「大丈夫ですか!？」

？「あ…た、探検隊の人、で…すか。な、なぜここ…にいるって…わかつ、たんですか…」

ラック「え？依頼したのあなたでしょ？」

？「？な、なんの…ことで…す？今僕は…まんぞ…くに体は動かさせません…し、救助依頼は…だすことが…で、できません。」

そして僕は気づく。嵌められたのと殺気、(どつちかというと熱気?)に。

？「くくく、まんまとだまされたな。貴様の墓だ！ここは…!」

ブーバーの火炎放射!!

ラック「うわ！（よけたらロゼリアにあたる！なら…!）」

ラックのリーフブレード!

火炎放射を叩き斬った!!

ラック(見た目以上に重い!)

ブーバー「はっ。炎タイプが草タイプに勝てるっても？」

ラック「…ふう。じゃあ…ハ(小声)ロゼリアさん耳塞いでください。…」

ブーバー「何をするきだ？」

ラック「“弔怨波”!!」

っ…!」

ブーバー「ぐっぐああああああ!!」

ブーバーを倒した。

ラック「依頼達成。あ大丈夫ですか？えーと…」

ローズ「ローズです。」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第21話 ラック仲間作る（前書き）

ラック「前書きを 最初にかかず 後に書く。」

作者「わるいかな べつにいいじゃん そんなこと。」

ラック「それならば あなたの命 今消える。」

作者「私が悪かった。」

第21話 ラック仲間作る

ラック「ふーむ…。僕はこのブーバーの策にまんまと嵌められて今回報酬無しってことか…。まあ助けられたから……………！」

そうだ、とラックは呟き、ローズのほうに近寄ってこう言った。

ラック「君が仲間になってよ。それが僕の今回の報酬ってことで。そしてローズはこういった。

ローズ「私どもは代々主君に仕える種族。それ故にあなたにすべてを捧げよう。…………すみません。代々の掟でこう言わなきゃいけないんです。」

ラック「いや、それより君って8才だよね？学校は？」

ちなみに言っておくがこの世界は人間界と同じで6才から12才までが入る学校を小学校。12才から16才までが中学校。高校、大学と続いていく。

ローズ「僕がいる種族は学校に行けないんですよ。これも代々の掟です。」

ラックは少し疑問を持った顔をして言った

ラック「じゃあそんな種族が何故ここに居て倒れていたんだい？」

ローズ「それは…簡単ですよ。マゼンダの羽を求めてたんですよ。マゼンダの羽。これは炎を司る羽である。」

ラック「…マゼンダの羽。でもそれをゲットする必要はどんな種族でもないと思うから君の意志？」

ローズ「そうです。別にこれといった理由はないですけど。」

ラックは謎が解けたようだ。

ラック「それより早く帰ろ。」

ローズ「…ええ、そうですね。」

ラック「敬語禁止」

ローズ「…わかった。」

ところかわってギルド。

ロウ「あれ〜ラツ君ラツクのことその隣の人だ〜れ〜？」

ラツク「僕の新しい仲間だよ〜。」

ロウ「君そんな喋り方じゃないだろ。……………まあ名前は？」

ローズ「ローズです。」

ロウ「へえ〜ローズ君かあ〜ローズローズローズローズローズ〜
ズ〜」

ラツク「気にしないでね。癖みたいなもんだから。」

ローズ「あ、ああ…うん。」

ロウ「それより。ラツ君がお土産持って帰ってきたし…みんな〜し
ゆ〜〜〜〜〜ごほっごほっ！！

「〜〜〜〜〜う！！」

ラツク「途中むせたね。」

ヤヨイ「どうしたのですか？」

こいつはヤヨイ。一人称は拙者。ザングースね。

ロール「ふわわ〜な〜に〜？」

この子はロール。一人称は私でエルフーン

シルマ「どうした、どうした？」

あととはめんどい（ry）都合上割愛する。

ロウ「最近。ブラック機関とホワイト機関がぶつかり合っ、という
噂がある〜！」

ちなみにブラック機関はゼクロムがおさめててホワイト機関はレシ
ラムがおさめてる

ソウル「はあ？そ、そんなの〜！！」

シルマ「やべーじゃんかよ〜！！」

ヤヨイ「拙者…不安である。」

ラツク「腹減った〜。」

ローズ「え？何機関？ホワック機関??」

ロール「ふ、わわ〜」

若干2名常識外れのことを言ったが気にしないでくれ。

ローズ「その〜なんちゃら機関ってなんですか？」

To be continued...

(微妙な所で終わったのは気にしないで！)

第22話 (前書き)

第22話しかないのはわざと。

第22話

「……は？」

4人同時。ちなみにラックとロウはわかった、という顔をしてる。ラック「ロウさん。もしかしてローズが血罪族ってことを知ってたんですか？」

ロウ「もちろん。だってその一族にはとある特徴があるんだ。」

血罪族ちうみそく：それは犯してはいけない犯罪を犯した“乱心一狂”と呼ばれる一人の大犯罪者の関係者が呼ばれる名前。

その一族は差別、偏見は当たり前のこと。住む所までも決められていた。

シルマ「ブラック機関は財力を収めるんだ。ホワイト機関は権力で忘れてはいけないのは：崇迅機関、罪を収める。」
少しローズの顔が曇る。

ソウル「だけど：財力と権力。合体ではなく激突なんかしたら…。

一体どうゆうつもりなんだ：レシラムにゼクロム。」

ロウ「噂だし気に留めるだけでいいよ。」

ラック「そうだね。」

「……………」

リーク「ちょっと待ってよ。まずローズさんは血罪族？そんな聞いたことありませんし、二つの機関については知ってますがそんなこと起きたことは、公になってません！！」

ラック「…やべっ。」

ローズ「…やばっ。」

バレット「おい：何があつた？」

ラック「このこと話しちゃ駄目だった。ここでおしまい。」

リル「え、ええええ！？逆に気になるよ！？」

ローズ「ま、血罪族についてはその“乱心一狂”が言った言葉で差別はなくなつたんだ。」

リーク「その言葉気になる…」

ラック「手紙でだけどね…（解読したの僕なんだよね…）えーとだな…解読文だと…」

“我激怒。我良殺、然我周巻込永久続成、君達物世界滅亡。”（私は怒っている。私を殺すのはいい、しかし私の周りをこのまま巻き込むのなら君たちの世界は滅びるだろう。）

ローズ「“乱心一狂”の恐怖はみんなが知っている。だから崇迅機関はその罪をもみ消したのさ。」

リル「崇迅機関…」

ラック「でもね、公には発表してなかったけど、実はその文には続きがあるの。それに…ローズへ向けた手紙が。」

ローズ「え？」

ラック「だからこそここに来た意味がある。読むよ。」

“我薔薇親。然事隠。何時此文訳来願。我後悔無、然正直言…主心配。主此文読其頃我死亡多分…”

To be continued...

第23話 隠せぬ動搖（前書き）

ラック「P・O・C・Pの毎日もよろしくね！」
作者「こつちでも宣伝かい。」

第23話 隠せぬ動揺

“主強多分。我生、又会願。(訳してみよう！ヒントは何時はなんときって読むからいつかって意味)”

ローズ「“乱心一狂”が…ぼ、僕の親?”

バレット「そんなこと言ってるいいのよ!?”

ラック「…だって、今言わないでいつ言うの?”

ラックの言葉が終わると後ろのドアが…

…消えた。

リル「え!?”

リルク「な、何!?”

?「若きツタージャよ。我が文をよくぞ読み解いた。」

ローズ「あ、ああ…!?”

そこにいたのは…赤く、赤く染まった…

…ファイヤー。

バレット「お、おかしいつて!炎タイプから草タイプが生まれるな

んて!!”

?「信じられぬか?”

ラック「どうもです。“乱心一狂”…フリーズさん。」

フリーズ「おや?分かってるのか?”

ラック「最後の文に書いてありましたよ。」

“我名：>止動<”(実際の文?? ???? ?)

“動き”が“止まる”。色々考えましたけど…

ゲームがフリーズすると動きが止まる。

こう考えました。」

フリーズ「これはあっぱれじゃ。但し、私の能力を知らんようじゃ

な。」

ローズ「“完全を超越した物事”(パーフェクト?オブ?エンド)「

フリーズ!!”

ローズ「物質を消すスキル。」

フリーズ「ふーむ…こやつら2人の力は侮れんのお…。消しますか。」

く、狂ってる。心が乱れている…！

だから“乱心一狂”なのか…！

ラック「そうやすやすとは消させませんよ。物事は常に幸運でなくちゃいけない。不正で奪った(ゲット)した能力なんてききません

フリーズ「言うのお…だが貴様に何がわかる…！」

ラック「わかりますよ。

僕だって…

不正で固めた、

不正なほどの力“殺さず生かさずの永遠の苦心”(デッドオアエン
ド)

が押しつけられましたから。」

To be continued...

第23話 隠せぬ動揺（後書き）

次回完結！

とても残念な終わり方です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0420z/>

バレット学園日記！！

2012年1月6日23時53分発行